ドイツ人建築家ポール・シュルツェ＝ナウムブルクの建築思想について
-ヴァイマール期(1919-1933)の「屋根論争」におけるモダニズム建築批判を中心に-

内田研究室　竹本　真

研究概要・目的：本研究は、近代ドイツで、当時最も影響力を持っていた「ナショナリスト」とされる、ドイツ人建築家ポール・シュルツェ=ナウムブルク(Paul Schultze=Naumburg:1869-1949)に注目し、これまで着目されてこなかったナショナリズムの観点よりモダニズム建築の考察を行った。

特に、近代ドイツの重要な形態論争である、陸屋根の使用の是非が問われた「屋根論争」での論考に着目し、ナウムブルクの建築思想の分析と、「屋根論争」への関与を通じてモダニズム建築の形成過程への影響関係を明らかにすることを目的とする。近代ドイツのモダニズム建築の再考より、近代ドイツ建築及びナウムブルクについて新たな視座をもたらすことを目指した。

研究成果：

苦労した点や感想など：コロナ禍の影響で、ドイツでの資料収集や実際の建築物を見に行くことができなかった点が心残りであり、本研究に不足している点と感じています。本研究で得られた知見に満足することなく、本研究での知見を手がかりに研究を進めていきたいと思います。

指導教授である内田青蔵先生、内田研究室特別助教授である須崎文代先生、本学建築学科の先生方に心より感謝申し上げます。